

## 新刊紹介

### 上羽陽子・金谷美和編『躍動するインド世界の布』 Ayami Nakatani ed. *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*

中谷文美

(岡山大学文明動態学研究所)

ここで紹介する2冊は「布と社会」をめぐるテーマを扱っており、いずれも数年間にわたる共同研究の成果である。

上羽・金谷編『躍動するインド世界の布』は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が進めてきた地域研究推進事業の一つ、南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（通称：MINDAS、代表：三尾稔）を母体に行っている。その中の「布班」（代表：上羽陽子）が国立民族学博物館において企画展を開催し、その関連書籍として本書を出版した。いわゆる学術書ではないものの、「場をくぎり、人をつなぐ布」「神にとどく布」「政治をうごかす布」「布がうみだすグローバル経済」という4つのテーマにしたがって配置された26のエッセイは、各筆者の長年にわたる調査経験をもとに、社会における布の多彩な役割を描きだしている。

布の最大の特性は、なんといってもその可塑性・可変性にある。インドのように、一枚布を裁断したり縫製したりせずとも自在に用いる社会では、布がサリーやターバン、肩掛け布などとして人の身体を包み込むだけでなく、日本でもかつて多用された風呂敷のように運搬具となったり、収納具となったりする。また仕切り布として聖なる空間を出現させたり、男女の空間を分けたりするし、敷布として客をもてなす場を創り出したりもする。

さらにさまざまな技法で加飾がほどこされることで、布は情報を伝えるメディアともなる。ここでいう情報には、身につける人の帰属、地位や富、あるいは政治的主張までもが含まれる。政治スローガンの横断幕はわかりやすい例だが、時には女性のまとうサリーにバングラデシュ独立の願いを込めたベンガル文字がデザインされたり、インドの総選挙前に首相の顔がデジタルプリントされたりする。そうした具体的事例とその背景が、豊富な写真とともに平易な文章で伝えられることで、読者は布と社会の多様な関係

に思いを馳せることができる。

もう1冊のNakatani編『Fashionable Traditions』は、不変ととらえられがちな「伝統」と流行／移り変わりという意味での「ファッション」がどのように結びついているかという点をめぐって、インドと日本の事例を核にしつつ、アジア各地の事例を取り上げた論文集である。科学研究費補助金（基盤A）の研究課題「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」及び国立民族学博物館での共同研究「伝統染織品の生産と消費—文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる」の研究成果や、関連する複数の国際学会でのパネル報告がもとになっている。研究会自体は日本国内の研究者から構成されていたが、英語での論文集を編むにあたって、なるべく多様な視点を盛り込むべく、韓国、インド、アメリカ、カナダの文化人類学者からの寄稿を得た。

各章で考察の対象となる布は、それぞれの地域・民族の生活文化や慣習に根ざした用途のために、特有の素材・技術・意匠により作り続けられてきたものである。ローカルな文脈において、そうした特定の布の作り方・使い方は、民族集団、宗教、性別、地位など、集団・個人間の差異を確認し、誇示するような働きを持つ。だが、軽くしなやかという特性ゆえに、布は古くから重要な交易品として広域を移動し、異なる社会や文化を結びつけてきた存在でもある。移動した先で新たな価値を帯びることもあれば、デザインや技法が布と共に別の社会に広まっていくことも珍しくない。そのような変化と革新の過程の積み重ねこそが、「伝統」と呼ばれる営為を存続させてきたともいえる。そしてその営為には、実にさまざまなアクターが社会的、経済的、そして政治的に関与している。

この論文集では、無形文化遺産の保護政策を展開するユネスコのような国連機関や各国政府、農村部における収入創出や失われゆく技術の存続・復興をサポートする国内外のNGOや社会的企業、さらに布の産地において新たな商品開発に取り組んだり、市場開拓を試みたりする事業者など、多様な主体の動きに光を当てる。その結果、国や社会ごとの個別性を超えて、異なる事例を架橋する次のような論点も浮かび上がってくる。

どんな布の産地においても、その布を作り、使ってきた現地の人々の生活様式は変化の途上にある。自分や家族、あるいは地域の消費者のための布づくりを維持しているところは今や非常に限られている。そういう産地であっても、化学染料や機械製糸、あるいは新しい型の織機などの導入

が相次ぎ、それは生産者にとって手間を省き、労働効率を上げ、新しい色の組み合わせなど表現の幅を広げる結果ともなる。他方、グローバルな市場では、昔ながらの生産技術、たとえば天然素材による糸染めや手紡ぎ・手織りが賞揚される一方で、移り変わる消費者の嗜好に合わせた商品展開が望まれる。この矛盾した要請に応えるべく、産地の職人や工房主たちは創意工夫を重ねることになる。

各章をつなげて読むことにより、そもそも伝統とは何か、技術の継承とはどうあるべきか、消費者の求める真正性（authenticity）は生産者にとってどのような意味を持つのか—布や工芸品に限らない議論へと導かれる問いが見えてくる。

これら2冊の新刊書は、「考えるのに適した素材（food for thought）」としての布の可能性を示すものである。と同時に、共同研究の成果の示し方についても一定の示唆があるのではないかと考えている。他分野もそうかもしれないが、文化人類学では、科研費などによる研究会とは別に、特定のテーマや地域を主題とした共同研究が盛んにおこなわれている。一般には、和文論文集としてその成果をまとめ、出版することが多い。異なる地域を対象に異なる課題

に取り組んできた研究者が一堂に会し、共通の問題意識を真ん中に置いて議論した結果が、読み応えのある論文集に結実することにはむしろ意味があるが、多くの読者を獲得するものとはなりにくい。

博物館での企画展という、開かれたかたちでの研究成果の共有を試み、カラー図版をできる限り入れた書物を編むこと、そして日本人研究者による共同研究であっても、国外の研究者と協働し、英語による論文集を刊行すること（こちらは出版社の意向で図版が非常に少ないが）。布という、ローカルな生活世界に根ざしながらもグローバルな流通や消費の対象となってきたモノを取り上げた共同研究ならではの取り組みとも言えるかもしれない。

上羽陽子・金谷美和編『躍動するインド世界の布』（昭和堂、2021年）  
Ayami Nakatani ed. *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, Lexington Books, 2020

